

# 大崎市子どもの心のケアハウスだより 《12月号》

令和3年12月2日 大崎市教育委員会

## 2021年の我が家の良いこと探し！



ポインセチアの花が街を彩る季節になりました。保護者の皆さまには、お変わりなくお過ごしのことと推察いたします。

コロナ感染拡大、東京オリンピック・パラリンピック開催、衆議院議員選挙等々、慌ただしく過ぎた2021年も残すところ3週間余りになりました。各学校では1年を振り返り、一人一人の成長の証や、やり残したことを確認し、2022年のさらなる飛躍に向けての準備段階に入っているところです。

さて、年末恒例となった1年の世相を表す「今年の漢字」。今年も今月12日に発表されます。ちなみに昨年は「密」。新しい生活様式『「密閉・密集・密接」の『三密を避ける』を反映しました。「今年の漢字」は、日本漢字能力検定協会主催で行われますが、「時間（とき）デザイン研究所」というところでも同様の募集をしています。「2020年振り返り」の上位3位は、「密」「禍」「耐」。「2021年の目標・思い」では、「明」「楽」「希」。著名人が挙げた漢字には「夢」「光」などがあり、「光」を選んだ歌手の重森あゆみさんは、「2020年は色々な意味で世の中が大変なことになった年だったので、2021年には、少しでも『光が射す』、希望を持てる年になってほしい」という思いを込めています。コロナ感染が幾分落ち着く中、気持ちが明るくなるような漢字が選ばれることを期待したいですね。

ところで、皆さんにとって今年1年は、どのような年だったでしょうか。しばし年の瀬の慌ただしさを忘れて、お子さんとともにゆっくりと1年を振り返り、我が家の1年を表す「漢字一文字」や「10大（重大）ニュース」を茶の間の話題にしていかがでしょうか。できなかったことや、やり残したことでなく、良かったことや楽しかったこと、心が明るくなるような出来事を家族全員で探すのがポイント！「2021年の良いこと探し」です。

コロナ禍の中で頑張ったお子さんや家族の皆さんを互いに誉め、認め合ったりしながら、笑顔で新しい年を迎える大事なひとときになればと願っています。

### 相談室開設のお知らせ



冬季休業中の2日間、小・中学生や保護者の方々、教職員を対象に、カウンセリング相談室を右記のとおり開設します。

学習面や友人関係、登校を渋る等、お子さんの学校生活を送る上での様々な悩みや、子育てなどで気になることがありましたら、気軽にご相談ください。夏季休業中と同様、佐藤卓也公認心理師が相談に応じます。

なお、相談を希望される方は、12月24日（金）まで、下記の電話にご連絡ください。

\*:☎:\* ☎:\*:☎:\*: ☎:\*:☎:\*: ☎:\*:☎:\*: ☎

令和3年も残すところ3週間となりました。今年1年、ケアハウスに対し、保護者の皆様や学校等関係機関の方々にご理解やご協力をいただき、ありがとうございました。来年も、よろしくお願いいたします。

日にち：1月6日（木）・7日（金）

時間：①10：10～11：00

②11：20～12：10

③13：20～14：10

④14：30～15：20

場所：大崎市中央公民館 集会室2



12月27日（月）～1月3日（月）まで、ケアハウスを閉所します。

新年は、1月4日（火）9：00より開所します。よろしくお願いいたします。

子は親の鏡

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる  
 とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる  
 不安な気持ちで育つと、子どもも不安になる  
 「かわいそうな子だ」と言われて育つと、子どもも不安になる  
 子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる  
 親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる  
 叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう  
 励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる  
 広い心で接すれば、キレる子にはならない  
 誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ  
 愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ  
 認めてあげれば、子どもは、頑張り屋になる  
 分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ  
 親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る  
 子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ  
 やさしく、思いやりを持って育てれば、子どもは、やさしい子に育つ  
 守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ  
 和気あいあいとした家庭で育てば、  
 子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

『子どもが育つ魔法の言葉』（2003年P H P 文庫）より

著者：ドロシー・ロー・ノルト（教育家）

レイチャル・ハリス（精神科医）

訳者：石井千春

ドロシー・ロー・ノルトは、著書の「はじめに」の中で、次のように述べています。

わたしがこの詩で伝えたいことは、とてもシンプルです。子どもは常に、親から学んでいるということ。子どもは、いつも親の姿を見ています。ああしなさい、こうしなさいという親の躰の言葉よりも、親のありのままの姿のほうを、子どもはよく覚えています。親は、子どもにとって、人生で最初に出会う、最も影響力のある「手本」なのです。子どもは、毎日の生活のなかでの親の姿や生き方から、よいことも悪いこともすべて吸収してしまいます。口で何かを教え込もうとしてもダメなのです。親がどんなふうに喜怒哀楽を表すか、どんなふうに人と接しているか。その親の姿が、手本として、子どもに生涯影響力を持ちつづけることになるのです。

子どもは、皆個性豊かです。自分で何かを造り出し、自分でものを考える力を持っています。親としての真の喜びは、その子の個性を伸ばし、生き生きとした毎日を送ることができるように見守ることではないでしょうか。（略）子どもは、本当に日々親から学んでいます。そして、大人になったとき、それを人生の糧として生きてゆくのです。

「子育て」は「親育て」とも言われます。子どもの心に寄り添い、ともに成長する親でありたいですね。